

文化学園服飾博物館だより

第3号
May, 1990

これからの10年

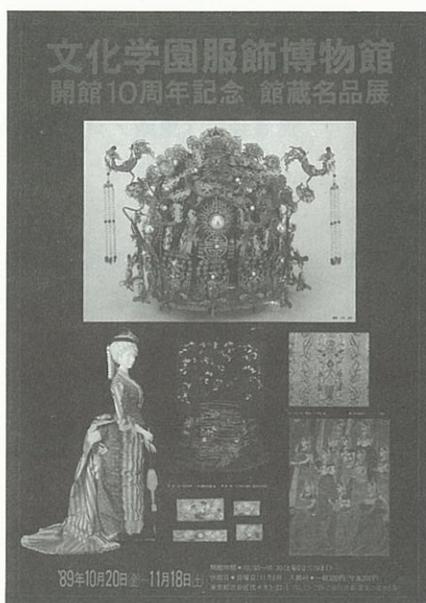
昨秋、文化学園服飾博物館は開館10周年を迎え、これを記念して特別展『館蔵名品展』を開催し、大好評のうちに幕を閉じることができました。これだけ多くの名品が博物館に所蔵されていることにおどろいたと言う感想も聞かれましたが、展示室の広さに限りがあるため、また保存上大切にしたいため、展示できなかつた名品も数多くありました。この特別展は博物館活動の10年の歩みをふりかえるとともに、未来を考える良い機会でした。

これからの10年は、学園再開発によって博物館の新しい建物ができあがる時であり、世紀末最後の10年として20世紀を集大成し21世紀を展望するときであります。博物館の歴史にとって、これほど意義ある時代はほかにないでしょう。それだけに先人たちの築き上げてきたものを大切に、日々研鑽を積み、技術を磨き、深い知識を身につけた多くの有能な人材が育っていく必要があります。

これまで服飾博物館は小さいながらも、服飾の専門博物館として、また教育博物館として、明確な理念と目標をもって活動を続けてきました。さらに今後の目標として、変貌する社会の要請にこたえて創造と研究の刺激となる展示、心豊かなひとときが過ごせる心地良い空間を人々に楽しんでもらうことを目指していきたいと思つています。若い人々の感性をとらえる爽やかな新しい風の吹きわたる博物館をイメージしていきたいものです。

日々の活動の柱は収集、保存、研究、展示、普及といったことですが、収集に関してはこれまでの所蔵品をよく調査し足りないところをうめるとともに、アジアの諸国の現地に赴き、洋風化の波の中に伝統が消えつつある20世紀最後の10年の貴重な服飾資料が、いかに実際の生活で使われどのように作られているかを調査・研究し収集を行うといったことも、夢で終わらせたくないことのひとつです。

資料の保存については、目下真剣に取り組まなければならない研究課題で、機会のあるごとに博物館、研究所などに専門家を訪ね、最善の方法を模索しているところです。また展示は、与えられた条件の中で小さな工夫を積み重ねています。たとえばマネキンは着装にとってとても大事な要素ですが理想的なものをもとめて開発していく必要があります。このように博物館はたえず多くの課題をかかえ、イノベーションの道を一步一步進めています。今後とも皆様の暖かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。



デザイン 北畠 耀・文化女子大学教授

(服飾博物館学芸室室長 道明三保子)

博物館歳時記 平成元年度の活動報告

3月3日

}

4月15日

『館藏品展』西洋：「西洋服飾 1930-45年」1930年から45年までのイギリスやアメリカのイブニング・ドレスとアフタヌーン・ドレスなど30点。日本：「小袖・装身具」江戸時代後期から大正時代までの小袖15点と髪飾り（櫛・弁・簪など）と袋物（宮迫・紙入・煙草入など）50点。常設展示：「工芸品」

5月10日

}

7月4日

『館藏品展』東洋：「インドネシア・フィリピンの服飾と染織」インドネシアのスマトラ島、ジャワ島のものを中心に、バティック（ろうけつ染）、金更紗、イカット（緋）などの腰布、肩掛、男女の婚礼衣裳など25点を展示しました。日本：「庶民の服飾（明治～大正）」明治から大正時代に着用された仕事着・大漁着・火事半纏・着物・祭衣裳など27点。常設展示：「工芸品」



5月31日

講演会 「東南アジアの服飾文化」 展示中の「インドネシア・フィリピンの服飾と染織」に合わせて講演会が開催されました。講師は亘 純吉・文化女子大学助教授（文化人類学）

7月15日

}

10月5日

『館藏品展』「韓国の服飾」服飾博物館所蔵の1910-45年頃の李朝末期の服飾など54点展示。とくに李王家の徳恵姫に関連する宮廷衣裳は歴史的に極めて貴重な資料で、徳恵姫の唐衣・裳・鏡台、化粧具など今回はじめてまとめて紹介しました。これらの服飾品は、1956年に当時文化女子短期大学学長であった徳川義親氏に贈られたもの。徳恵姫は韓国併合の犠牲者ともいえるべき歴史上の人で、少女の時に日本に送られ悲劇的な一生をおくった方です。同時展示として「西洋服飾1946-70年」、「小紋・紅型」



7月15日

講演会 「朝鮮朝服装の変遷」 講師は韓国ソウル市よりお招きした石 宙善・壇国大学大学院教授

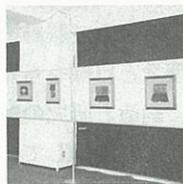


7月15日

}

7月20日

館外展示 『アンデスの染織展』文化女子大学附属長野高等学校（長野市）で開催。A. D. 1000-1500年頃、中央アンデス地帯で繁栄したチャンカイの染織品を、服飾博物館の所蔵品の中から33点出品しました。この展示は博物館が協力し、同校の文化祭に合わせて行うもので、今回で4回目。質の高い内容がよるこばれました。



10月20日

}

11月18日

『一開館10周年記念特別展一館蔵名品展』服飾博物館所蔵品の中から服飾に関する名品を選び、日本、東洋、西洋の資料ごとに展示室を分けて展示しました。名品展は昭和54年の博物館開館の時に次ぐもので、開館以来の10年間の新収品を加えた展示で、古今東西の水準の高い服飾品・染織品を幅広く鑑賞する良い機会でした。展示内容は「日本」：正倉院裂・名物裂・装束裂・陣羽織・小袖・能装束・明治天皇妃（昭憲皇太后）の大礼服・唐衣裳（十二単）など名品約50点。「東洋」：中国清朝末期の宮廷衣裳、古代新羅金製品、朝鮮朝末の宮廷衣裳、インドネシアのイカ



ット、フィリピン山地民・台湾先住民の服飾品、インドの手描き更紗、ペルシアの刺繍など約30点。「西洋」：ルイ16世時代、エンパイア、ロマンティック、クリノリン、バウンスル、アール・ヌーボー、ベル・エポック、アール・デコの各スタイルと1930年代の、衣裳、帽子、アクセサリーなど約30点。

10月21日

大沼 淳服飾博物館館長の「私のオフタイム」

鈴木康夫氏とテレビで対談

昨年10月21日、テレビ東京に出演。博物館の誕生から今日までの歴史についての話は大変興味深いものでした。「博物館収蔵品は文化学園理事長に就任以来30年間精魂こめて集めてきたものです。それらの古今東西の貴重な服飾品や染織品は各地域の文化の特色をよく示しています。服飾の歴史上、重要な分野の資料を網羅したファッションミュージアムを作ることを目指してきましたが、衣服に関係した調度品、装身具、小物類も多数集められ、まさに時間、空間を越えて人類の生活文化を一堂にかいしている場所といえるでしょう。江戸時代の小袖を見ると、デザインは近代的でしかも技術などは今の人が追いつかないくらい高度なものです。200年前の江戸時代にもこんな立派な物が作られていたことに驚かされます。服飾博物館は『古きを尋ねてあたらしきを知る』ところです。」と前おきし、展示資料の詳しい説明がなされました。



●館長の出演している「私のオフタイム」ビデオは服飾博物館にありますので、ご覧になりたい方はご連絡下さい。

11月2日

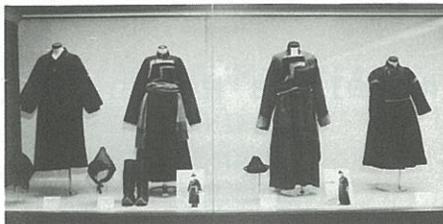
館外展示 『郷愁のパリ1920代=展』 目黒区美術館で開催。当館より1925～30年代にかけての、当時のモードの特徴をよくとらえた細身のシルエットのドレスと、それに合わせた帽子を出品しました。展示にあたり、辻ますみ・文化女子大学助教授の協力のもとに着せつけを行いました。



12月10日

12月4日

『第4回ソビエト連邦民族衣裳展～ブリヤート自治共和国』今回は、モンゴルに接するブリヤート自治共和国からお借りしたバイカル湖周辺の民族衣裳を展示しました。文化学園の招待により2月6日、ツィレンピーロフ D. T. 文化大臣と、バルダレーエワ S. B. 国立建築博物館学芸員が来日、さっそく博物館の展示を見学されました。大臣は「民族衣裳が自国でもこのようにまとまって展示されることは少なく、文化学園服飾博物館でこのように立派に公開され感激した」と語っていました。



2月17日

4月末

文化北竜湖山荘に隣接して、江戸時代後期に建造された宏壮な町家が飯山市内より移築されました。この建物は、文化学園北竜湖資料館として4月末より一般に公開し、邸内の一部には、日本各地の郷土玩具を展示いたします。



平成2年度展示

『館蔵服飾の美展』 3月5日～4月14日

服飾博物館所蔵品の中から服飾に関する優品を中心に、西洋、日本、東洋に分けて、古今東西の服飾の美を幅広く取り上げました。西洋は、ルイ16世紀時代から1910年までの時代の流れを代表するヨーロッパのドレスとバッグ。東洋は、アジアの多様な民族服飾の中から、中国清時代の衣裳、蒙古の衣裳、台湾の服飾品、フィリピンの山地民族の服飾品、インドネシアのイカットと金更紗、インドのサリーと子供服、日本は、装束類、武家服飾、小袖、能装束などを紹介。卒業・入学の時期にあわせた『歴史的服飾の入門とまとめ』といえる展示でした。昨年の特展『館蔵名品展』と共通する展示構成ですので、今回の展示の参考資料として「館蔵名品展図録」をご参照下さい。

『館蔵染織の美展』 5月1日～6月22日

服飾博物館所蔵品の中から染織に関する優品を中心に、型染め、手描き、絞り、緋、紋織物、刺繍などの技法別に、古今東西の染織の美が比較できるように展示いたします。コプト裂、インカ裂をはじめとし、西洋は紋織物とプリント、東洋はインドの更紗、絞り、緋、インドネシアのイカットとバティック、中国の刺繍、日本の唐織、友禅染め、絞り、緋など紀元6世紀頃より20世紀初頭までの、世界各地で多彩な展開をとげた染織文化を紹介いたします。世界の代表的な染織の文様や技法を幅広く知ることができます。

『東西の着装美展』 7月9日～9月14日

西洋の服飾の中で、時代の変化をもっともわかりやすい形で表しているのが女性のドレスです。その立体的なシルエットは時代ごとに特色があり、いかに肉体から離れ理想的なシルエットを形作るかが工夫されました。西洋のドレスは「締める」と「ふくらませる」ことがポイントとなっています。一方、東洋の服飾の特色の一つとして、一枚の布をからだに巻くことがあげられます。巻衣の代表的なものにインドのサリー、インドネシアのカイン・パンジャンなどがありますが、それ以外にも被り物、肩掛けなどに数多く見られます。東洋は「巻く」ことに焦点をあてます。

この展示は、文化女子大学が開催する夏期公開講座の一つとして7月25日、26日に行われる「東西の着装美」に合わせて企画されました。

『特別展』 三井家旧蔵品を中心とした小袖展 10月15日～11月24日

『第5回ソビエト連邦民族衣裳展』 12月8日～2月16日

利用案内

【休館日】日曜日・祝祭日（11月3、4日は除く）

夏季休暇（8月6日～8月18日）

年末年始（12月22日～1月5日）

学園の創立記念日（6月23日）

11月5日、6日

展示替えの期間

【開館時間】平日…午前10時～午後4時30分

土曜日…午前10時～午後3時

（入館は閉館の30分前まで）

【入館料】

	個人	団体(20名以上)
一般	300円	200円
学生	200円	150円

（特別展の料金は別に定める。）

『文化学園服飾博物館だより』第3号

発行所 文化学園服飾博物館

〒151 東京都渋谷区代々木3丁目22番1号

PHONE 03-299-2387

※文化学園の職員・学生、及び職員が同伴する方は無料